

石峰&抱月のふるさと『地域まるごと博物館』

波佐ネット通信

No. 136 2019.9.12

地域研究センター協議会

【参加団体】

西中国山地民具を守る会

波佐文化協会

能海寛研究会

ほたる湯館G・ゴルフ場

御幣俵は民俗研究のタイムカプセル



御幣俵

【御幣俵】について

御幣やおみくじ、御札(ふだ)を昔から、粗末にしては、バチが当たるということで、茅菰で作った小さい俵に、年々詰め込んで、屋根裏に吊るしておく。これを吊るすことで、火災予防(火難に合わない)という信仰があった。

「御幣俵」が沢山有る家では、5~6個(100~150年間)も吊るしてあり、この俵の多い、少ないで、「この家は代が古い」と、屋根普請の時には、よく会話された。

この外に、俵の中に江戸末期の暦(こよみ)が多く(波佐・長田・小国地区共に)入っていた。例外として、特に、変わったものは、眼帯にお守りを縫い込んであるものもあり、眼病を神頼みした様子や、猪・鹿除けに養父大明神のお守り札もあった。また、神仏習合の名残であろうか、仏壇に吊るす掛軸を一緒に入れたものもある。寛政12年に「猪多く、養父郡大明神より勧請祈願するも効果なし」という記録があり、「御幣俵」に納まっていた、このお守り札が史実を裏づける資料である。

茅葺き屋根から、瓦屋根に移行したことで、家々の御幣俵は消滅した。幸いにも、50年前に、御幣俵の蒐集保存したことで、これらの御幣俵を丹念に調査分類することで、過去の神信仰の範囲がつかめるであろう。100年前のご洗米は、赤茶けている。お守りの中身は、杉の皮とか、桧のコケラというものもあった。また、古くは、戸籍をお寺で管轄していたと思われる、お寺あての死亡通知(飛脚用の手紙)も入っている。正に、「御幣俵」は研究素材のタイムカプセルである。(浜田市金城歴史民俗資料館蔵)